

シリアカヒヨドリ (*Pycnonotus cafer*) に関する情報

○評価 特定外来生物

○生態系被害防止外来種リスト その他の定着予防外来種

○原産地 パキスタン、砂漠地帯を除いたインド全域、ネパール、中国南部、バングラデシュ、ブータン、ミャンマー、タイ北部原産

○定着実績 太平洋諸島のフィジー、サモア、トンガ、ハワイ諸島のオアフ島、東アラブのクウェート、カタール、オマーン、フランス領ポリネシアなどに導入 (Lever, 1987、自然環境研究センター (編著), 2008、GISD)。日本での定着の記録はないが、神奈川県で観察例がある (川上・叶内, 2012)。

○評価の理由

海外では生息地が競合する在来鳥類を本来の生息地ではない藪のような環境へ追い出してしまうことが知られており、日本国内に定着した場合には、落葉広葉樹林や二次林、低木林など生息環境の重なる在来鳥類と競合する可能性がある。また、海外では果樹や野菜に対する害鳥となっており、日本でも農業被害を与える害鳥となるおそれがある。

○被害の事例

【生態系に係る被害】

- フィジーでは、生息地が競合する在来鳥類を本来の生息地ではない藪のような環境へ追い出してしまうことが知られている (Lever, 1987)。
- フランス領ポリネシアでは、本種及びインドハッカ *Acridotheres tristis* の生息する地域では、IUCN のレッドリストにおいて CR (Critically Endangered) に選定されているタヒチヒタキ *Pomarea nigra* の営巣放棄や雛の死亡する事例が多いことが確認されている (GISD)。
- マーシャル諸島では、侵略的な外来植物であるランタナ *Lantana camara* の種子散布に寄与し、分布拡大に効果的な役割を果たしている。また、ポリネシアの多くの島々を荒廃させた侵略的な外来植物であるオオバノボタン *Miconia calvescens* の分布拡大にも寄与している

(GISD)。

【農林水産業に係る被害】

- フィジーでは果樹や菜園に対する害鳥と考えられており、ある耕作地域ではシリアカヒヨドリの食害によって収量が3%減少したことが確認されている。特にトマトやナス、キャベツ類、ササゲなどの豆類に被害があった (Lever, 1987)。

○被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 原産地の一部と気候条件が近く、国内にも定着できる可能性が高いと考えられる。

(2) 社会的要因

- 愛玩飼養を目的として輸入されることがあり、ペットとして飼養されている可能性がある。

○特徴並びに近縁種、類似種などについて

- 全長 19~20cm、体重 28~40g。雌雄同色で、虹彩は茶色で嘴と足は黒色。全体に暗茶色で鱗状の模様がある。頭部は黒色で、ふさふさした冠羽がある。背面は茶色で淡色の羽縁がある。腰部は白色、胸部は背面と同様、淡色の羽縁を持つ茶色で、腹面に行くほど淡色となる。尾羽は黒色で先端部分が白色。尻と下尾筒の明るい赤色が和名や英名の由来となっている (自然環境研究センター (編著), 2008)。
- 本種と同属の種として、日本にはシロガシラ *Pycnonotus sinensis* が生息している。国内では2亜種が確認されており、亜種シロガシラ *P. s. sinensis* は八重山諸島に自然分布するが、沖縄島に生息する別亜種 *P. s. ssp.* は移入分布の可能性はある。

○その他の関連情報

- 世界の侵略的外来種ワースト 100 に選定されている。
- 世界中に持ち込まれており、29 カ国で定着している。
- ニュージーランドのオークランド周辺に少数定着していたシリアカヒヨドリは、農業害鳥としての特性があったため 1954 年から 1955 年の間に根絶された (Lever, 1987)。

○主な参考文献

GISD (Global Invasive Species Database)

http://interface.creative.auckland.ac.nz/database/species/impact_info.asp?si=138&fr=1&sts=sss&lang=EN (2015. 12. 15 アクセス)

川上和人・叶内拓哉 (2012) 外来鳥ハンドブック. 文一総合出版. 80pp.

Lever, C. (1987) Naturalized birds of the world. Longman, Essex, UK. 615pp.

自然環境研究センター (編著) (2008) 決定版 日本の外来生物. 平凡社, 東京. 479pp.

ヒゲガビチョウ (*Garrulax cineraceus*)

○評価 特定外来生物

○生態系被害防止外来種リスト その他の総合対策外来種

○原産地 中国（東部、中部、南部）、インド（北東部）、ミャンマー（西部、北東部）(Hoyo et al., 2007)。

○定着実績 1998年に愛媛県で初めて確認され、2000年には高知県でも確認された。2005年には愛媛県で巣立ちビナが観察され、定着し繁殖していることも確認された（濱田・佐藤ほか，2006）。2001年以降、確認記録が増加し、愛媛県南予地方と高知県西部・中部地域の広い範囲において記録されている。日本以外での移入は知られていない。

○評価の理由

1998年に初めて愛媛県で確認されて以降、愛媛県南予地方及び高知県西部・中部地域の広い範囲に分布を拡大している。すでに定着し特定外来生物に指定されているチメドリ科4種（ガビチョウ、カオグロガビチョウ、カオジロガビチョウ、ソウシチョウ）は、森林に侵入して鳥類群集の構成を大きく変化させ在来生態系を大きく攪乱させることが報告されており、本種についても今後個体数が増加すれば同様の影響を及ぼすおそれがある。

○被害の事例

【生態系に係る被害】

- 本種に関する報告は無いが、類似種のガビチョウは在来生態系を攪乱することが報告されており、同様の被害を及ぼす可能性がある。

○被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 国内の落葉や常緑の低地林は下層植生が発達し、原産地の中国南部・東南アジアの山林地とよく似た生息環境を提供している。また、食性の幅が広いため、比較的容易に定着することが可能。
- 中国南部ではガビチョウと混群を形成することが知られていること

から、生態もガビチョウと似ている部分を持つと考えられる。そのため、今後、個体数が増加すれば、餌や営巣場所などを巡る競争により生態の類似する在来種へ影響を与えるおそれがある。

(2) 社会的要因

- チメドリ科はペットとして飼育されることが多く、本種についても愛玩飼養を目的として輸入・飼養されている可能性がある。
- 現状、国内における人為による移動放逐、分布拡大が行われても法的な規制はない。このような行為が行われないように法的な対応を整えておく必要がある。

○特徴並びに近縁種、類似種などについて

- 全長 21~24cm、体重 43~55g。雌雄同色で、嘴は黒色から鈍い黄茶色。顔（眼先、眉斑、頬、耳羽）は灰色かかったバフ白色で、細い黒色で眼の後方に伸びる過眼線により二分される。頭上から後頸にかけてと上背の上部の一部は黒色。背面はバフみのある灰茶色。上尾筒と腰部はわずかに青白い。腹部はバフ色。翼上面の初列雨覆は黒色、それ以外は灰色。尾羽は赤みがかかった灰茶色で羽縁部内側には広く帯状の黒色模様があり、先端部は白色（Hoyo et al., 2007）。
- 本種は、すでに国内に定着し特定外来生物に指定されているガビチョウ *Garrulax canorus*、カオグロガビチョウ *G. perspicillatus*、カオジロガビチョウ *G. sannio* と同属である。
- 本種の属するチメドリ科の全種（特定外来生物に指定されている上記 3 種を除く）は 2005 年に未判定外来生物に指定されている。
- 繁殖期はペアで、非繁殖期は小群で行動し、中国南部ではガビチョウと混群となる。

○主な参考文献

Hoyo, J. del, A. Elliott and Christie, D. A. (eds.) (2007) Handbook of the birds of the world Volume 12: Picathartes to Tits and Chickadees. Lynx Edicion, Barcelona. 815pp.

国立環境研究所ウェブサイト (2016) 侵入生物データベース ヒゲガビチョウ.
<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/20470.html>
(2016. 8. 12 アクセス)

濱田哲暁・佐藤重穂・岡井義明 (2006) 外来種ヒゲガビチョウ *Garrulax cineraceus* の四国における記録と繁殖. 日本鳥学会誌, 55(2) : 105-109.

四国外来鳥類研究会（2007）四国地域におけるチメドリ科外来鳥類の定着実態の解明.

自然環境研究センター（編著）（2008）決定版 日本外来生物. 平凡社, 東京.
479pp.